

学会小舎にて

—仮空人物記または英雄待望論—

Nさんは社団法人日本天文学会の事務所に勤める事務員である。定款にある言葉でいうと有給嘱託員である。事務所は東京天文台の一隅にある古い建物なので、天文学会と天文台の区別のつかない人が実に多くいるのだが、二つは全く別の組織なのである。昔は天文台職員が随分学会の仕事をしていたのではないかなと、Nさんは考える。今では会計検査が厳しくて減茶苦茶はできない。しかし外国の学会のように財政的基盤がしっかりしていない以上、天文台の外に独立した居を構えるのはまず無理なことだ。中学生らしい会員から手紙がくる。天文台の大きな望遠鏡で星が見たいのですが？ 僕は変光星の観測をしようと思うのですが、どうしたらよいのですか？ 天文学会にはどんな観測設備があるのですか？ Nさんは暇をみてわかることには返事をかく。天文台に勤めていたことのあるNさんには天文の質問にもたいていは答えられる。しかし天文台の器械のことは天文台に訊いて貰わねばならない。大概の質問には返信料が添えてない。財政が窮屈になって返信料のない質問には答えられないことにした。悪いような気もするのだが、本をちよっと見ればわかることや、常識のひどく欠けた質問状が少なくないのも事実なのだ。

学会事務の仕事は多岐にわたる。Nさんもはじめは先輩のM氏や理事たちから教わりながら仕事に追まわされていた。今では、仕事が多いので暇がないという意味ではやはり追われているのだが、自分で仕事の順序を立て、理事の要求を先取りして作業をされるようになった。M氏がやめたとき、大体のことはわかっていたつもりだったが、M氏が自分の知らぬうちに実にいるいろいろやっていたのを思い知らされたものだ。Nさんは述懐する。

学会に入りたいとか月報が読みたいとかの照会は毎日ある。入会申込書を送ったり、入会するか本屋で購ってほしいと返事をする。住所というのがまた泣き所で、ひどいときは入会申込用紙が宛名人不在で戻ってきた。配達も融通がきかなくなったが、住所を正確に書かない人や移転を知らせてこない人も多い。入会手続は数種のカードに記入し、入金を帳簿につけ、名簿や月報を送る。帳簿は原簿のほか項目別収支の帳簿もつけねばならぬ。日日の仕事としては、事務所ですぐ処理の出来ない郵便物を各理事に届けることがある。届けながらいろいろの情報を流すのが学会の仕事を大いに円滑にする。学会に

出入する郵便物の量はかなりなもので、事故を起こさないように気をつける。Nさんは、事務処理を迅速にとはじめ誰かに言われた。それは望ましいことだが、内容を考えてむしろ効率の良いように反応するように必掛けているという。

Nさんは非常に有能で、月報や欧文報告の、編集者でなくとも出来る仕事を引きうける。そのお蔭で大部楽になったとJ²氏やH氏は感謝している。月報は毎月、欧文報告は年4回、封筒の宛名印刷、発送、支払いと仕事が続く時は特に忙しい。年末などに両方重なるとさすがのNさんもばて気味となる。また年末の支払いは苦しくて堪らぬ。学会の財政でも自分の財布の乏しい時と同様切ないものだと思ったという。欧文報告の出た後は、立派な研究を発表した人達に別刷代の請求をする。請求される方もつらいだろうと思うが、80枚から100枚近い書類に3ヶの印を押すのも手間のかかる作業ではある。実際理事や評議員に数種の書類を送るなんていうことでも結構時間を食う仕事なのだ。

かくして事務所の毎日は、郵便の送迎、書類の作成と整備、支払関係、バックナンバーや封筒類の点検、面倒なクレームの応接、電話の応待等に明け暮れる。つまり理事はほとんど雑用をしながらもよくなったのである。その代わりNさんは外国宛の手紙も書けば、郵便物を堆く積んだ自転車局へ走らせもする。ちよっと暇だと思えば、カードを繰って不断に調査をしているので、理事や外部からの質問にも答えられないことはない。時に学会小舎を訪れる会員また非会員の若人に学会のことなど説明することもある。若人達は古い建物に何ら天文学らしい器械の1台もないのを見て失望するのだが、それもまた仕方のないこととNさんは考える。結局のところ、日本の天文学研究の発表機関たることが日本天文学会の使命だと思っているのである。大事なことを忘れていたがNさんの給与は年100万に満たない。

現実にはNさんのような人はいない。老練な人と、配するに体力的にこれを補うことができ結構頭もよい高校生位の人という組み合わせがあれば、かなり理想的だが、これとて人を得るのは夢に近いし、2人で上に書いたすべてが出来るかというとなかなか難しいようである。そこで実際は、編集でも庶務会計の雑用でも、数人の理事と3人の専任またパートタイマーの職員で片付けている。

(近藤雅之)